

中川成之輔先生を偲んで

佐 中 孜

東京女子医科大学第4内科

中川先生の訃報に接したのは、透析医学会を目前に控え、発表の準備に余念のない医局員を集めた医局会の最中である。波紋のように重い雰囲気がかの会の流れをさえぎった。以前より、おかげんがよろしくないということはご自身より伺っていたので、私としても覚悟はしていたが、ついに他界の日がやってきてしまったとの知らせを受けると、思いは複雑になった。神はどうしてこうも残酷なのであろうかとうらめしくなると同時に、そのタイミングは、腎臓病治療に先進的に取り組まれてきたいいかにも中川先生らしいために、まさに神に愛され、そのままこの世から大きな手を振りながら去っていったしまったという幻想にしばらく、絶句してしまったのを覚えている。

私が中川成之輔先生のお名前と業績を初めて知ったのは昭和47年頃にまで遡る。先生は、当時、既に人工腎臓に関する著書を出されていた。太田和夫先生の「人工腎臓の実際」という本もその後に生まれたものである。私は、著者である中川先生の年齢を聞いて2度

のビックリ。またしても驚嘆の声を上げた。その時のことを今までも鮮明に覚えている。

こうして追悼文を書きながら『いかに先生が若くしてその類稀な能力を発揮されていた』かあらためて認識させられるのである。思えば、所属は違ったが、中川先生はその時から私の師であり、先生がお書きになった事を通じて様々なことを勉強させて頂いた。

そして、最近数年は、比較的直接、教えるを受けるという機会を得るようになった。特に、人工臓器学会雑誌の編集委員会やヘパリン研究会ワーキンググループでは、先生は委員長を務められ、私を委員の一人に抜擢して下さると同時に卓越した編集あるいは企画理念をもって指導して下さった。

先生、ほんとうに有り難うございました。学んだことを必ず私なりに咀嚼し、後進に伝えてゆきたいと存じます。先生の安らかなお眠りをお祈りいたします。

合掌